

<穴あきリング>

写真の通り、半貴石の中心がドンと貫通されている。ドイツで仕入れたもの。こんなもの買うのは島田サンくらいしかいない、と同業の知人。予想外は男性が何人か求める人がいたこと。どう使うのか聞いてみると、壁に飾ってもいいし、皮ひもを通して首に下げるかも、と。シマダは素材購入後、表面へのデザイン、ペンダント機能を付加することも。



ペンダント機能付き



アクアマリン



ルチルクォーツ



ローズクォーツ

<NYはアメリカではない>

“NYに行ってみると良い”と未知の何人かに言われた。“?”である。当時、シマダの興味のなかにアメリカはなかった。知人にその話をすると、“良いかも。それにNYはアメリカじゃないから”と、理解不能な言葉に心が動き、NY ジュエリー ショーに申し込む。沢山の〇〇について述べよ、の間に悪戦苦闘し（当然とは言え、すべて英語で答えるのも大変）NY ショーとはこんなに面倒なものかと思いつつ指定された数の作品も送った。暫くして、“congratulation! おめでとう”の電話。知らずに“世界で10人の作家”にエントリーしていたのだ。真夏のNYで世界の作家たちとの交流により様々な中の自分を認識。ジュエリーとは何たるかを肌で感じられ、より自分を鍛えることを意識する。これはNYならではの収穫。日本では〈他と同じようであること〉を必要とされると感じていた。この国では、それはなかった。街を歩いているだけで沢山のことに気付かされた。今ではNYよ、ありがとう！である。



NY ショー
BIZ ブース



NY ショー
会場入口

<伊藤若冲>

いつの頃からか若冲展があると聞けば日本中どこへでも見に行っていた。若冲の作品は戦後、アメリカのバイヤーに買われ日本には少なくなっていた。なので日本での若冲展はサンフランシスコのバイヤーから借りての開催。江戸時代でありながら現代のアニメにも通じるような作品内容は多彩を極める。勿論“The 日本画”もある。行灯の乏しい光源のみでの繊細かつダイナミック、しかも多作。現代の我々は無数の過去の芸術に己の無能さを感じつつも恩恵を受ける幸せ。今も若冲愛は止まらない。



白い巨大象と小動物達
デザイン画のよう



The 日本画

<かつての絵画は宝石画?>

中世ヨーロッパの絵画は総じて暗い。理由は現在のような絵の具はなく、石を砕き土を混ぜて絵の具としていた故に画面は暗闇のようだった、ということらしい。更に年を経るとガラス(紀元前の古代ギリシャ時代にも存在)、石を粉状につぶしニカワで溶かして使っていた。後にカルサイト、マラカイト、ラピスラズリ等を砕き絵の具として使い、絵画は彩を持ち、明るい色彩になる。まさしく宝石画である！ レンブラント、ルーベンス等の絵画は、今で言えば“宝石画”のジャンルかも。



メノの金魚



アフリカ・ジンバブエ郊外の岩絵



CN-0515
ベネチアングラス (ハート形)
サファイア
タンザナイト アクアマリン
(ネックレス部分)



N-0525
上部のみを研磨した水晶原石
エメラルド サファイア K10
オパール K18